

言葉は意識の対象となつて捉えられる「色」（物質的存在）ではない。だからといって、意識それ自体でもない。現象として起こつている意識の事実やその意識内容を、「言葉」として表現することを見いだしたのが、人間が文化を創るような存在になるための最大の発見だったのではないか。人間は、立ち上がり足で歩くことを知ったとか、火を使つて「一本足で歩くことを知ったとか、火を使つて」などを発見したとか、いろいろと特徴が押さえられ、そこで動物からの飛躍があつたと

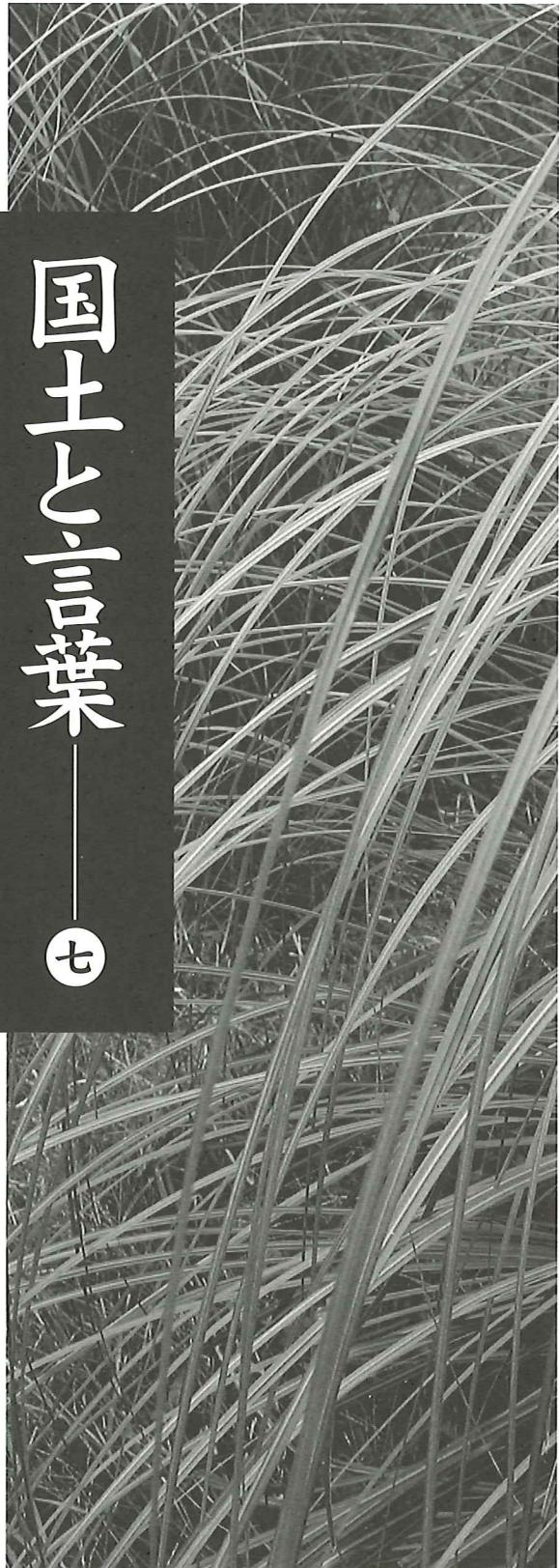
も考えられるが、言葉の発見ということほど目立つにくく、そして実は大きな発見はなかつたのではないか。これによつて、生きていくための経験の蓄積が、智慧の言葉として世代を超えて伝承されるし、その智慧を共有できる共同体も生まれてきたことであろう。

その言葉も、もちろん意識と深く関係している。物質でもなく意識でもなく、しかも意識生活に深く関連する領域だというのである。言葉は「事の端」であるともいわれるが、意識の事象を取り出して、ひとりの意識に繰り返し起ることや、他の人の意識にも同様の事象が起ることを言い当てるものである。たとえば、「腹立ち」ということは、だれにでも繰り返して起こつてくる心理であり、この言葉で誰にでも思い当たる共通の意識の事実を知りうるのである。しかし、同時にその

本多弘之
bonda hinoyuki

国土と言葉

七



言葉は、現実に特定の条件下で起つてゐる事実を、抽象的にしてゐるところがある。いつでも起つてゐる事象の一部分をのみ押さえるからである。だから、「こと」の「一端」だけである。

如來の大悲が一切衆生を「救い遂げずにはおかない」という願いを、衆生に呼びかけるにはこの言葉によるしかないと見極めるための苦衷を、「無量寿經」は「五劫思惟」と超時間的に語る。それは、この言葉というものが

の限界を伝説か熟知しているからであろう。しかし、この限界を超えても届けたいという志願なるがゆえに、あえて弘誓は「名」を方法として選択したのかとも思う。その無限の深い裂け目ともいえる事実と「事の端」との亀裂を超えて、衆生に存在の大宝（一如）を与えたいたい、ということを大悲の「修行」だと表現する。その修行はしたがつて「兆載永劫」の修行」ということにならざるを得ないのである。

無常のいのちでありながら、状況を超えていつでも出遇いうる普遍的な真理があるとするなら、それは「有為」のこの世の事柄とは、異なる何かであろう。それが仏陀個人の特殊体験なのではなくて、あらゆる衆生が平等にその真理に包まれ、その真理を生きているのに、それを知らない、というような事柄だと教えられる。諸行無常の一切の事象は「有為法」であるから、それと異質の真理は「無為法」であるという。

そもそも 無為法は本来 言葉には成り得
ない事柄なのである。言葉はもともと人間
に起る事象の一端を抽象化したものなのだ
から。しかし、人間が遭遇する真理として
教えるために、あえて「無為法」という言葉
を生み出した。その無為法に属するところがら

を、真如・一如・法性・涅槃等という。これらは言葉にはなっているが、われら衆生の体験内容には成り得ない事柄を、言葉で表してるのである。

この無為法という言葉で表さざるを得ない存在の道理を、われら愚痴の衆生の生活に少しでも近づけて触れさせたいというところに大悲方便の「兆載永劫」のはたらきを具した言葉が選び出された。それが仏の名号となつたということなのではないか。だから、名号は単に不相応行法であるのみならず、「無為

るから、生じもせず滅しもない。だから、名号は「無生の法」だともいわれる。そしてこの名号を大悲の行だと受け止めるところを「無生法忍」ともいうのである。無生法と消滅する生死とはまったく相容れない。その矛盾を突破して、生死のただなかに無生無滅の法との遭遇をもたらそうとする、それを大悲の方便というのではないか。だから、大悲のはたらきは「諸仏の世界」、つまり阿弥陀の淨土以外の世界で、「我が名字を聞く」ならば、「無生法忍」を与えようと誓う（第三十四願）のであろう。これを親鸞は「眞の仏弟子」の内実であると押さえているのである。五濁惡世のわれらは生死の凡夫であることを止めることなく、「無生無滅」の法と出遇うのだ、というのである。

言葉を通して、個人体験を超えた普遍の真理を万人のものにする、そのためには、「志願無倦」の永劫の修行が内面にはたらき続けている。煩惱に眼を暗まされているわれらに無碍の光明の明るみを与えるようとするすることは不可能をも背負い続ける悲願のみのなし得ることである。無限の断絶をも突破しようとする大悲の願行には、相応する資格のないのがわれら凡夫である。にもかかわらず大悲に恵まれるならば、それは深く感謝せざるにはおれないのである。

（ほんだ
ひろゆき・親鸞仏教センター所長）